

MI SA YAMA SITE
御射山遺跡 (第2次発掘調査)

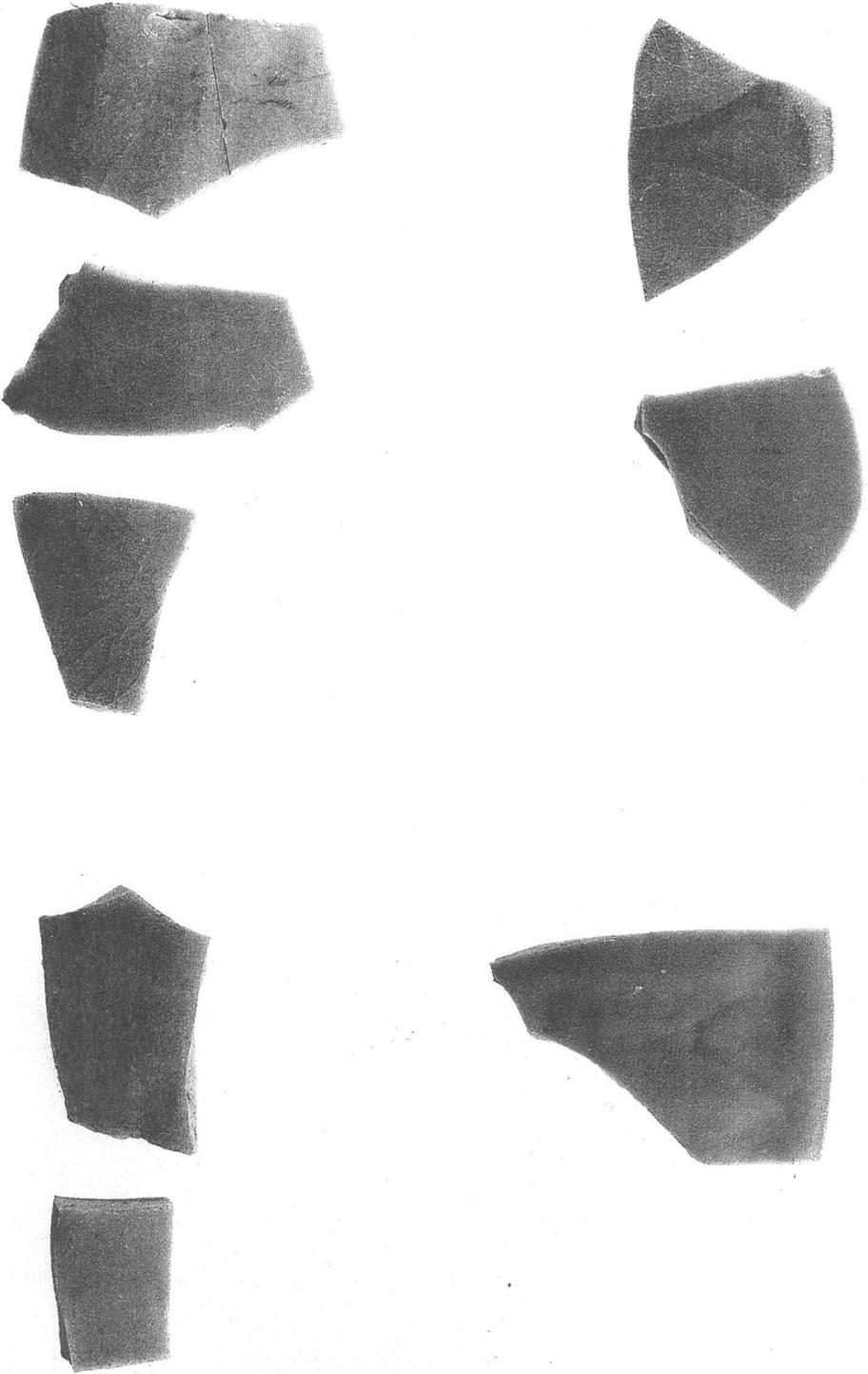
御射山地区県営畑地帯総合土地改良事業に伴う緊急発掘調査報告書



1986.3
長野県原村教育委員会

表紙地図10,000分の1 ○印が御射山遺跡（発掘地区）

御射山遺跡 出土の青磁片



序

このたび、「御射山遺跡（第2次発掘調査）」を御報告することになりました。こうした発掘のたびに私どもは、現在私達が居住し毎日の生活を営んでいるこの原村の地で、すでに数千年の昔、厳しい自然環境とたたかいながら生活し文化を創りだした先人の姿を想像し感動を覚えるとともに、そのすばらしい足跡を学ぶことに大きな喜びを感じずるものです。そして、こうした遺跡、遺物を眼のあたりにして先人の遺産を学ぶとともに、後世に継承する責任を強く感ずるものであります。

このたびの発掘にあたり、南信土地改良事務所の御配慮をはじめとして県教育委員会の御指導、そして地元の土地改良事業実行委員の皆様、地主の方々、発掘に携わっていただいた皆様の御好意・御尽力に深く謝意を表する次第であります。また調査報告書刊行に至る過程においてお世話いただいた関係者各位に対し厚く御礼申し上げます。

昭和61年3月20日

原村教育委員会
教育長 平林太尾

例 言

- 1、本報告は、「県営畑地帯総合土地改良事業御射山地区」に先立って実施した、長野県諏訪郡原村中新田と富士見町御射山神戸に所在する御射山遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2、発掘調査は、南信土地改良事務所の委託をうけた原村教育委員会が、昭和60年5月7日から18日にかけて実施した。整理作業は、5月19日から昭和61年2月10日まで行った。
- 3、執筆は、平出一治・日達 厚が話し合いのもとに行い、図面の作図とトレースは平出・高見俊樹、拓本は平林とし美、写真撮影は平出、編集は平出・日達が行った。
- 4、本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。
なお、本調査関係の資料には、76の原村遺跡番号を表記した。

発掘調査から報告書作成にわたって、長野県教育委員会文化課指導主事小林孚・太田喜幸、井戸尻考古館の武藤雄六・小林公明・樋口誠司の諸氏に御助言・御指導をいただいた。厚く御礼を申し上げる。

目 次

序	
例 言	
目 次	
1 発掘調査に至る経過	1
2 遺跡の位置と環境	1
3 いままでの調査	4
4 グリッドの設定と調査方法	6
5 発掘調査の経過	7
6 発掘の状況と土層	9
7 遺 物	11
8 結 語	13

参考文献

発掘調査団名簿

県営畑地帯総合土地改良事業御射山地区内における埋蔵文化財散布地

1 発掘調査に至る経過

昭和59年度から実施されている「県営畑地帯総合土地改良事業御射山地区」も2年目をむかえたが、御射山遺跡（原村遺跡番号76）の保護については、昭和59年10月17日に行われた長野県教育委員会の「昭和60年度実施予定の農業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財保護協議」で協議された。出席者は長野県教育委員会文化課・南信土地改良事務所・原村役場農林課・原村教育委員会の4者であった。

その後、地元に対する説明と協議を行い、原村教育委員会は、南信土地改良事務所から緊急発掘調査の委託をうけて、昭和60年5月7日から18日にわたり、御射山遺跡第2次緊急発掘調査を実施した。

2 遺跡の位置と環境

御射山遺跡は、中新田区の西方約1500m、中央自動車道の諏訪南インター東方約500m付近に位置し、茅野市（旧金沢村）・富士見町（旧富士見村）・原村の3市町村が境界を接し合うあたりに、諏訪大社上社の摂社である御射山社が鎮座している。その境内から東に広くひろがり、行政区分は原村と富士見町にまたがっている。



第1図 御射山遺跡（発掘地区）遠景

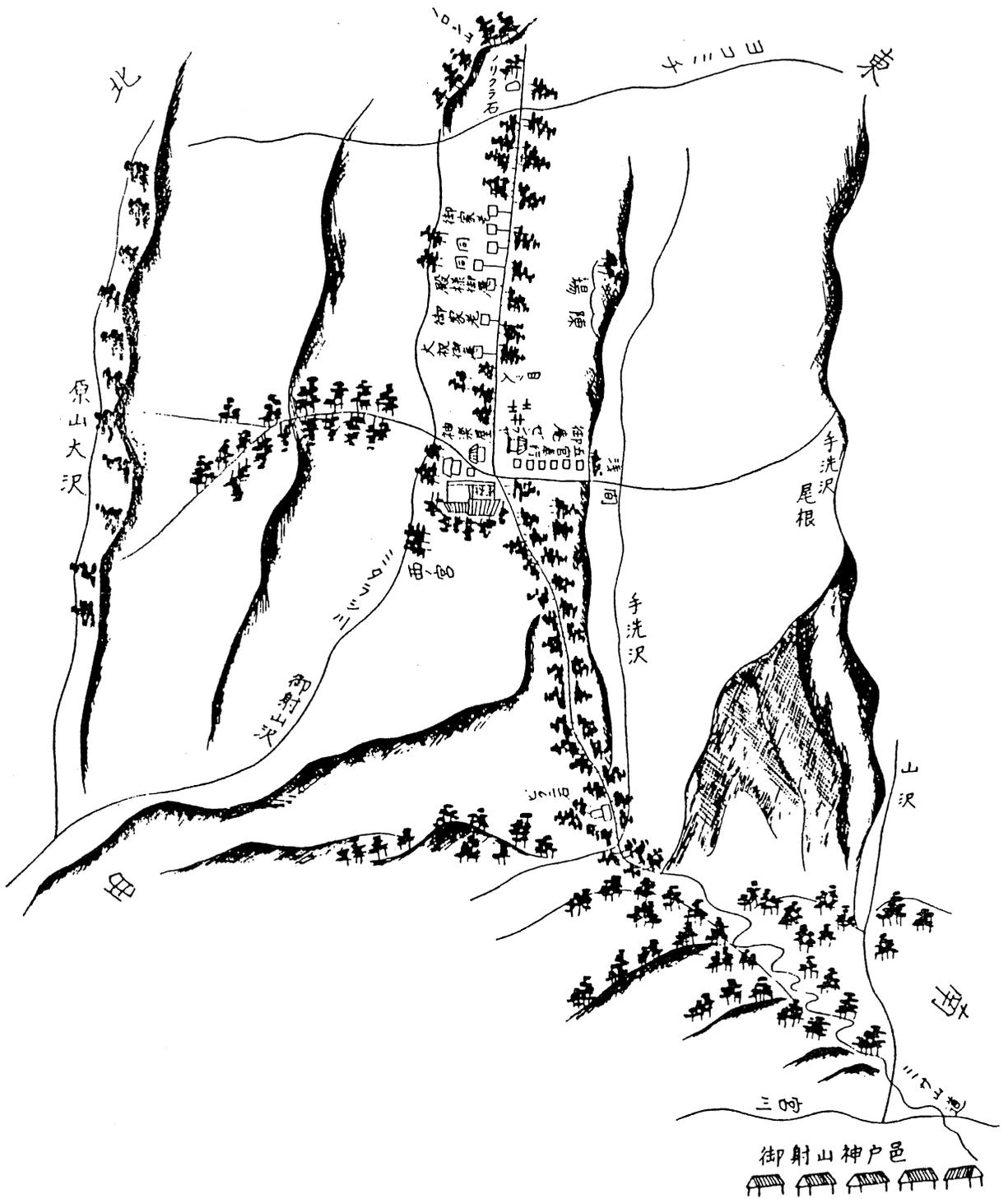
この一帯は、上社が執り行う年4度の御狩の神事のなかで最も大掛かりな「御射山御狩」の祭場にあたり、ことに中世においては、その神事が盛大であったことが同時代の文献によって伝えられている。

「諏訪神社信仰関係遺跡」の一つで、従来から付近には祭事を物語るような地名がみられる(第3図)。本調査地区の小字名は「花表原」であるが、同地について富士見村誌に「大鳥居跡と鳥居原」という興味深い記載がみえる。昭和59年度に緊急試掘調査を実施した花表原遺跡(第2図83)は、本調査地区の東に隣接しているが、「花表原」の小字名は広い範囲を示す呼名である。また、付近には、中央自動車道の建設に伴って発掘調査された手洗沢・頭殿沢・御狩野といった平安時代後半の遺跡が少なくない(第4図)。

発掘対象地区は、県道払沢—富士見線が遺跡を横切っており、県道の東方(八ヶ岳側)にあたり、遺跡全体からみたら東外れのわずかな範囲となるが、東および南側に接する地域はすでに整地作業が終了し、遺跡の部分だけが取り残されている状態であった。第1次

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
28	宮平							○		
58	判の木						○			
59	御射山北						○			
60	浅間沢		○							
65	梨の木沢						○			
70	南原西		○							
76	御射山		○				○	○	○	昭和59・60年度発掘調査
79	中御射山東		○							昭和59年度発掘調査
80	御射山沢		○							
81	堤之尾根		○							
82	前沢		○				○			
83	花表原		○							昭和59年度発掘調査
84	中御射山西		○				○	○		昭和59年度発掘調査
85	箕手久保						○			昭和61年度発掘調査予定
86	判の木東		○							

表1 御射山遺跡と付近の遺跡一覧

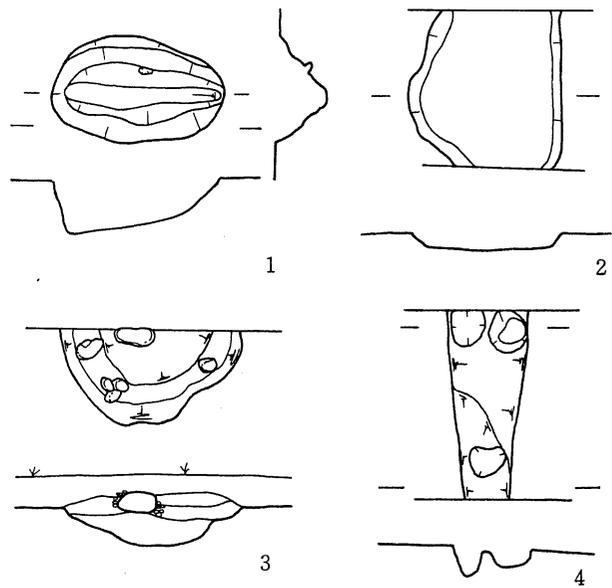


第5図 御射山社地分見絵図 (富士見村誌より)

土器と思われる破片1点を採集している。

また、富士見町教育委員会では、昭和59年11月5日から13日にかけて、県道弘沢―富士見線改良事業に伴う緊急発掘調査を実施し、第6図に示した陥し穴1基、小堅穴2基、溝状遺構1を検出調査している。遺構に伴う遺物はなかったが、近隣の調査事例から陥し穴は縄文時代早期、他の遺構は中世のものであると考え、遺跡外縁部の様子の一端をうかがうことができたとしている。

なお便宜上、富士見町教育委員会で実施した調査を第1次発掘調査と呼び、本調査を第2次発掘調査と呼ぶことにした。



第6図 第1次調査発見の遺構図 1陥し穴 2・3小堅穴 4溝状遺構

4 グリッドの設定と調査方法

発掘に先だち、地形にならったグリッドを設定したが、東西方向には50mの大地区を設け、東からA区・B区・C区というようにアルファベットを用いて地区割りをした。大地区の中をさらに2×2mの小地区（グリッド）に分り東西方向は東からA～Yのごとく区分した。南北方向には算用数字をふったが、遺跡の中心と思われるラインを51とし、そのラインを規準に南方向は50・49・48というように南に行くにしたがい小さくなるように、北方向は52・53・54と大きくなるように振分けた。

個々のグリッドの呼びかたは、たとえば第8図左上方の2×2mの発掘調査グリッドでみると、大地区はB区であり、小地区の東西方向はWラインにあたり、南北方向が70ラインで、それは「W-70」となる。したがって小地区の前に大地区を表記した「BW-70」となる。

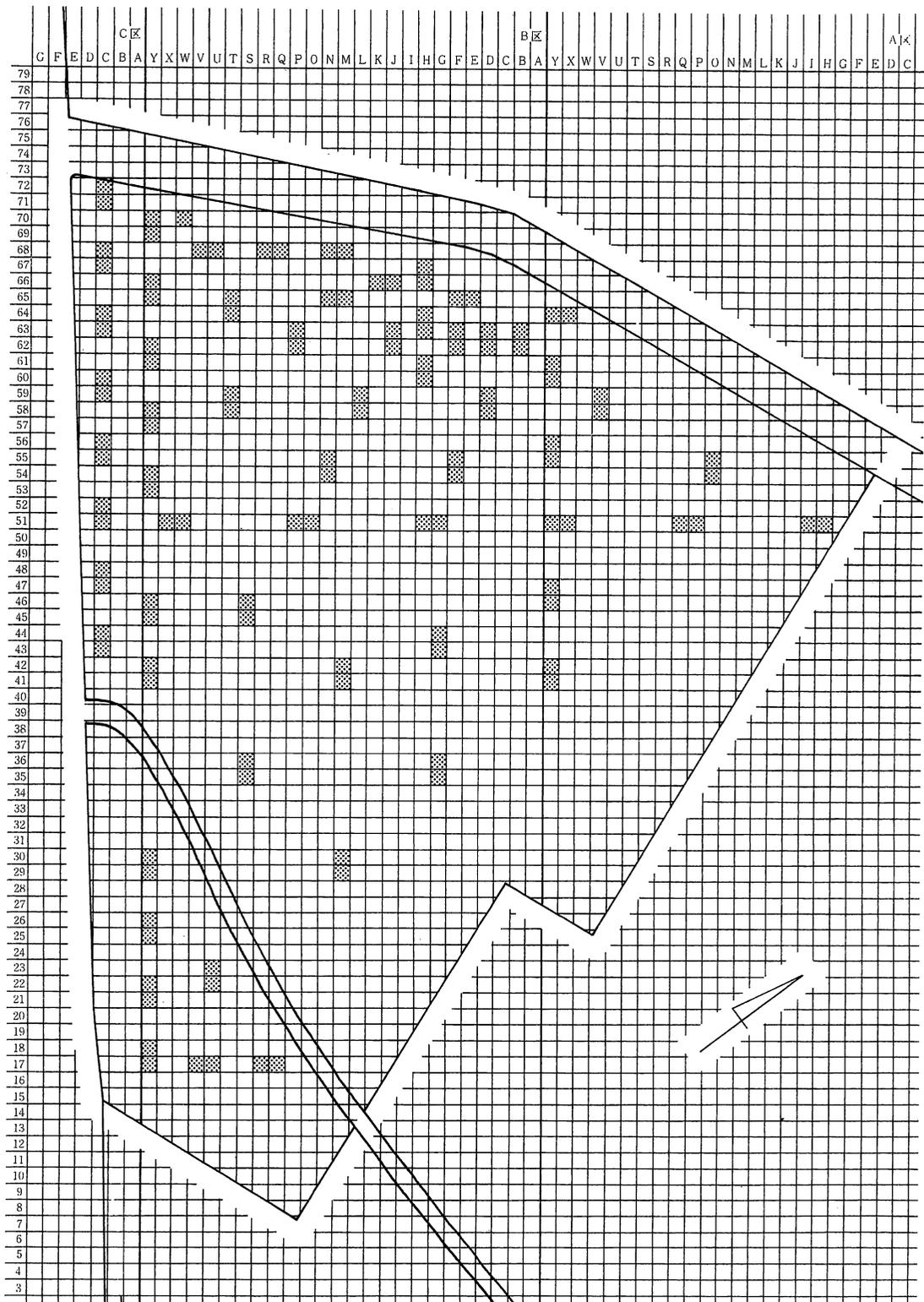
発掘は、調査対象範囲に2グリッド（2×4m）を1単位としたグリッド平面発掘を実施した。遺物の出土状態によって発掘調査グリッドが密になるところと、そうでないところがある。発掘は原則としてソフトローム層上面まで行った。

5 発掘調査の経過

- 昭和60年5月7日 今日から発掘準備をはじめ。
- 10日 発掘機材・テントの搬入。グリッド設定。
- 11日 調査開始にあたって教育長の挨拶のあと、テントを設営し、A区・B区のグリッド発掘。A区では地表下約20cmで数多い礫がみられたが、遺物の発見はない。BH-63グリッドから縄文土器片、BH-67グリッドから青磁片等が出土する。
- 12日 A区・B区のグリッド発掘。地表下20~50cmで礫がみられるが、人為的なものではなく、自然流出によるものであろう。BW-51グリッドから石鏃、AY-46グリッドから灰釉陶器片、BP-51・BW-51グ



第7図 御射山遺跡発掘調査区域図・地形図(1:2,000)



第8図 グリッド配置図 (1:800)

リッドから青磁片等が出土する。

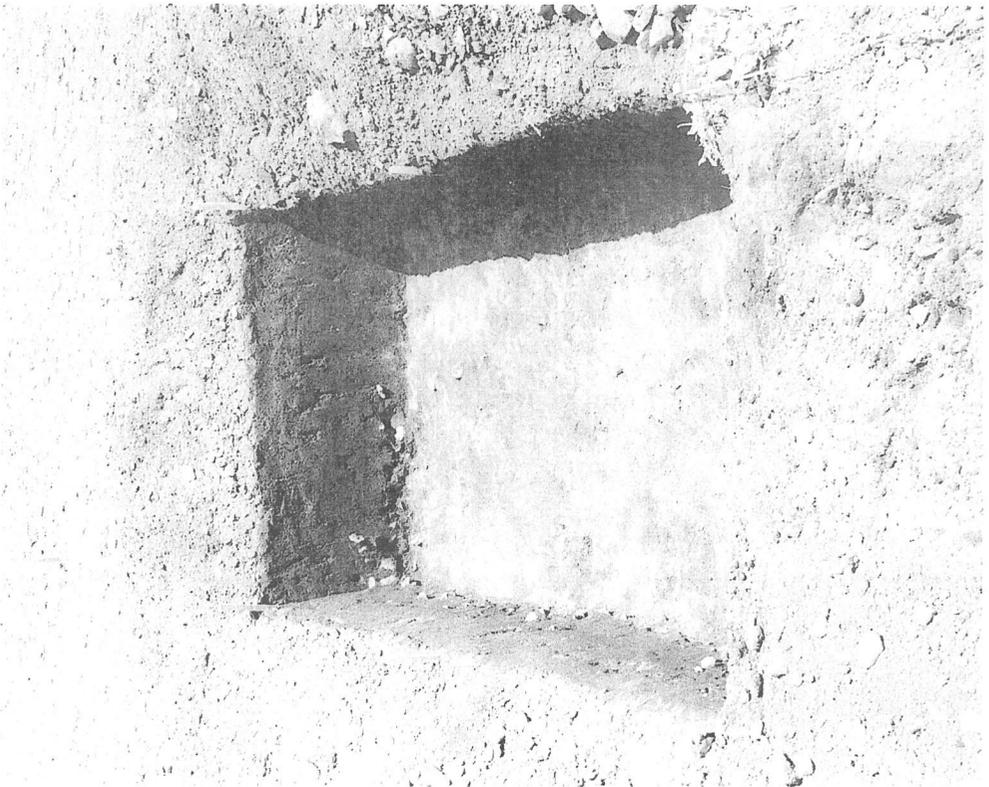
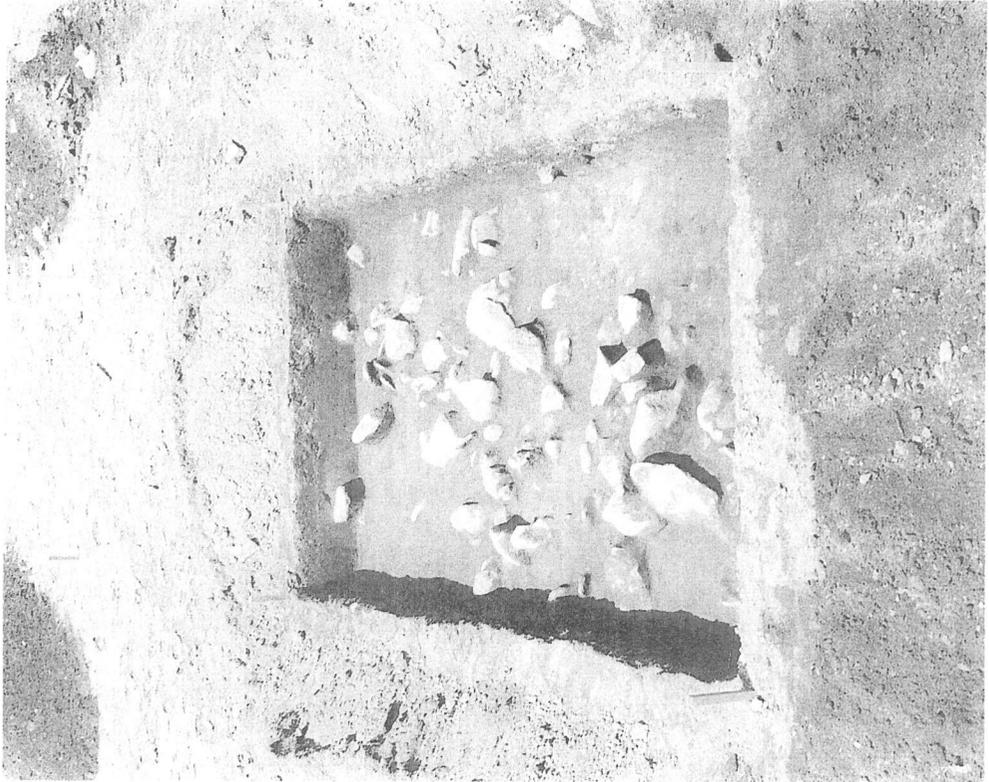
- 13日 A区・B区・C区のグリッド発掘。BY—53グリッドから石鏃。CC—60グリッドから青磁片等が出土する。BD—58・BD59、BW—51・BX—51、BY—25・BY—26グリッドの写真撮影。井戸尻考古館の樋口誠司氏に現地で第1次調査の結果等の話を聞く。
- 15日 A区・B区・C区のグリッド発掘。BL—59グリッドで縄文早期の押型文土器が出土する。個々のグリッドからの出土量は少ないが、土師質土器片と陶器片が発見されたグリッドは多い。
- 16日 A区・B区のグリッド発掘。
- 17日 A区・B区・C区のグリッド発掘。BK—66グリッドから打製石斧、BH—60グリッドから青磁片等が出土する。BF—54・BF—55グリッドの写真撮影。
- 18日 午前中はB区・C区のグリッド発掘。午後はグリッドの抗等を抜き片付けと、テントの撤去をする。

6 発掘の状況と土層

第8図のグリッド配置図に示したように、123グリッド492㎡の平面発掘を実施したが、出土遺物は少なく、遺構を検出するまでにはいたっていない。

本遺跡における基本層序は次のとおりであり、おおまかな観察結果を記しておきたい。

- 第Ⅰ層 黒褐色土層。畑の耕作土層で18cm前後の厚さである。客土した箇所が広くみられた。
- 第Ⅱ層 黒色土層。第Ⅰ層よりしまっている。厚さは10～50cmを計り、なかには、子供の握り拳大から頭大の円礫を含んでいるグリッドもみられた。基本的には上層から中世の遺物が、下層からは縄文時代の遺物が出土した。
- 第Ⅲ層 茶褐色土層。第Ⅱ層同様に円礫を含むグリッドもあり、礫の量は多い。まれにこの土層上面で縄文時代の遺物が出土した。これより下層では遺物は発見されなかった。なかには、この土層の認められないグリッドもあった。
- 第Ⅳ層 礫混入茶褐色土層。第Ⅱ・Ⅲ層同様に円礫を含み礫の量は極めて多い。礫の含量で第Ⅲ層と第Ⅳ層とを分離した。やはりこの層の認められないグリッドもあった。
- 第Ⅴ層 ソフトローム層。握り拳大より小さな角礫を含むグリッドが多い。



第9図 グリッド発掘状態

発掘区総体では、グリッドによって礫の包含量が多かったが(第9図右)、そのあり方は遺構として把握できるような規則性は認められなかった。また、地山である小礫混入のソフトローム層(第V層)を観察すると、51ライン付近は比較的深く沢状になっている上に、B区・C区の45～55ラインのグリッドに、礫が多量に包含されていたことから自然流出によるものと思われる。現在でも大雨の時などには多量の水の流れ道となることから領けることである。

7 遺 物

発掘調査の結果、縄文時代・平安時代から近世にまたがる遺物が発見された。これらの遺物を時代別に分類し若干の考察を加えてみたい。

(1) 縄文時代の遺物

発見した遺物は土器と石器がある。土器は破片ばかり8点、石器は打製石斧1点・石鎌2点と図示していない黒曜石の剥片・チップ3点、玉髓3点といずれも少ない。

土 器

第10図1・2は縄文時代早期の土器破片で、1は山形押型文土器、2は胎土に多量の繊維を含んでいた痕跡が認められる繊維土器で、焼成は良く堅い。3～8は後期初頭の土器破片で3は口縁部破片である。5～8は沈線と縄文が施されている深鉢の胴部破片である。胎土・焼成とも普通である。

石 器

第10図9は粘板岩ホルンフェルス製。半割品の打製石斧で、刃部側約半分と基部先端を欠損している。整形は粗いが形態は整っている。10・11は先端部に肩状のつくり出しを有する特徴的な石鎌である。10は青灰色のチャート製であり、全面に押圧剝離を施した比較的長身で薄手作りの優品である。11は黒曜石製で、片脚を欠損しているが、やはり薄手作りの優品である。

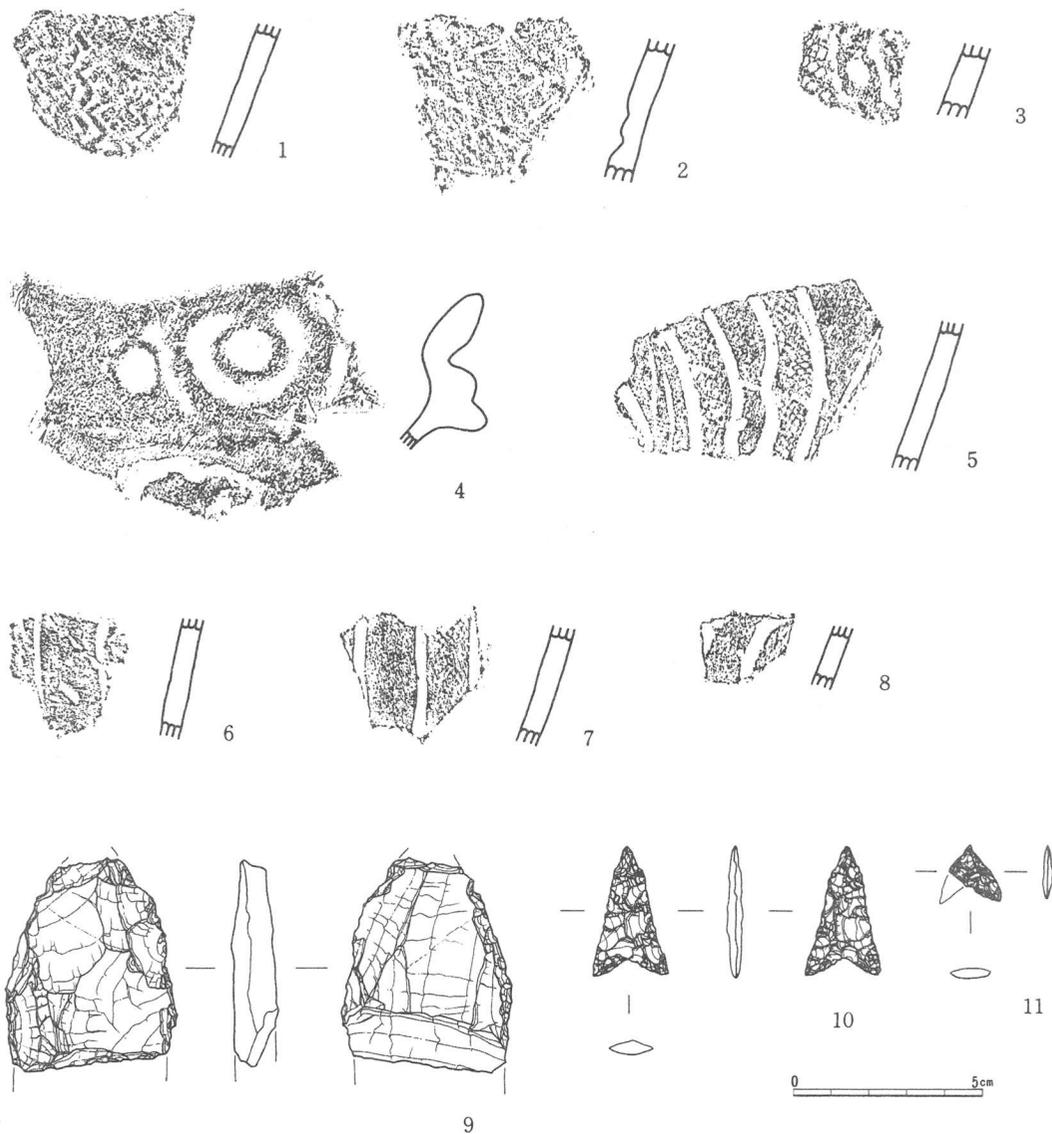
(2) 平安時代以降の遺物

出土した遺物は、小破片ばかりであったが灰釉陶器、土師質土器、青磁、美濃焼などと古銭がある。

土器と陶器

灰釉陶器は、小破片のため図示していないが碗の口縁部でAY—46グリッド第I層からの出土である。

土師質土器の多くは第II層出土であるが、わずかに第I層から出土したものと表面採集

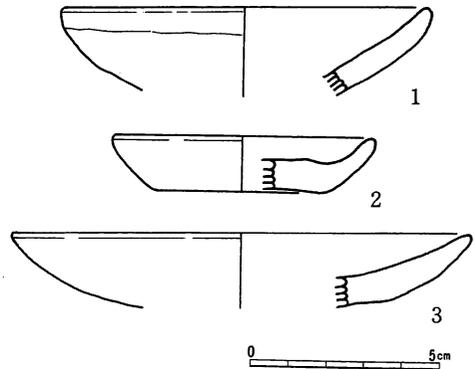


第10図 縄文時代の土器拓影と石器実測図（1：2）

したものもある。胎土により赤褐色系のもと褐色系のもとに大別できる。赤褐色系のもものは、破片から器形を復元した第11図の3点と、僅かな小破片とがあり、胎土には砂を含み調整・成形とも粗雑である。2の系切底の認められるものは、調整・成形はやや良い。焼成は普通である。褐色系のもものは、胎土は精練されていて調整・成形とも入念で良好である。小破片のため明確な大きさはわからないが、赤褐色系のものとはほぼ同大であろう。焼成は普通である。

青磁は、小破片であるが磁胎には青磁釉が厚くかかっているもので、BF—54、BH—

60、BH—67、BK—66、BM—65、BO—51、BW—51、CC—60、グリッド出土の8点と表面採集した2点がある。BF—54とCC—60グリッドの2点は第I層から残り6点は第II層からの出土である。10点全てが碗の破片と思われるが、BH—60とBH—67グリッド発見の2点は、口縁部の破片で外面に蓮弁文が施されている。陶器は13点出土しているが、BL—58とBL—59グリッドの第I層から瀬戸黒がそれぞれ1点と、BO—63グリッド第2層から御深井釉1点が出土した。全て小破片で器形を復元できるものはない。



第11図 土師質土器実測図(1:2)

鉄製品

古銭が1点出土したが、破損品で「通」の1字が認められるだけなので詳細は不明だが多分「寛永通宝」の破片であろう。AY—55グリッド第II層出土。

また、土師質土器と陶器類の帰属時期については、全て小破片のため明確な同定は出来ないが、灰釉陶器は当地方の平安時代後期の住居址出土資料と同様であり、12世紀であろう。土師質土器の褐色系資料の中には、灰釉陶器と同時期のものが含まれていることも考えられる。

土師質土器と青磁が本遺跡の中心となるもので、青磁は13世紀中頃に竜泉窯で焼かれたものである。したがって土師質土器も同じ頃の所産であろう。

陶器の中では、瀬戸黒が16世紀に美濃で焼かれたものであろうし、御深井釉は18世紀に、他の小破片は幕末以降のものであろう。

8 結 語

今回の発掘は、遺跡全体からみたらわずかな範囲に限られていたこともあり、発見資料は少なく本遺跡の性格を物語るまでには至らなかった。しかし、出土した青磁・土師質土器が全て小破片である点、御射山祭(祭祀)の性格を究明する手掛りの一つになるかもしれないし、「花表原」の^{とりいばら}小字内で青磁片等が発見されたことは、社を取り巻く小字名から御射山祭研究の一助になるものと思われる。

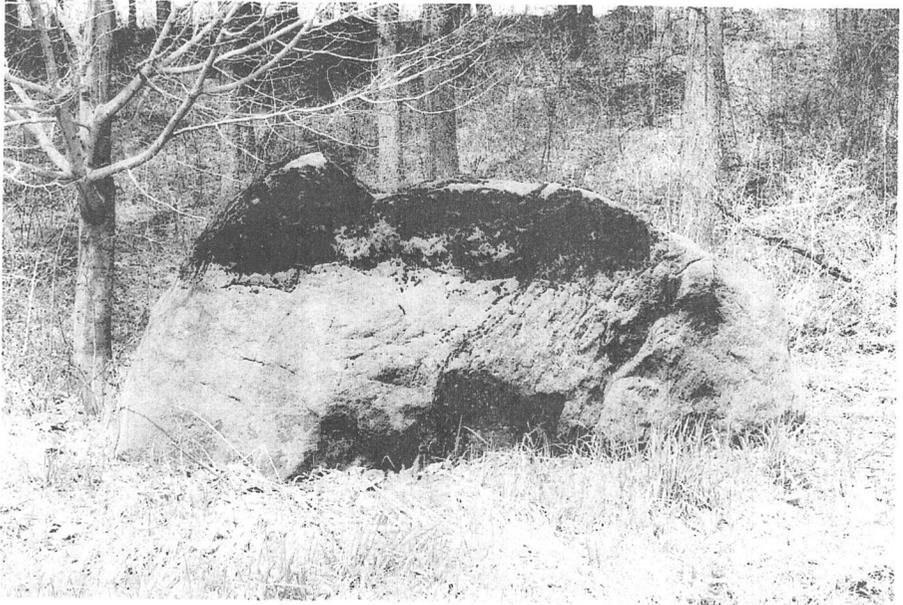
いずれにせよ、第1次発掘調査同様に、遺跡内における東側外縁部の様子の一端に窺うことはできたといえよう。

最後に、関係者各位ならびに発掘調査にたずさわった方々に厚く御礼申し上げる次第で

ある。

参考文献

- 1961.03 細川隼人編 『富士見村誌』
- 1980.03 長野県教育委員会 『八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書』
- 1985.03 富士見町教育委員会 『御射山遺跡発掘調査報告書 県道弘沢富士見線改良事業に伴う緊急発掘調査』
- 1985.03 原村教育委員会 『花表原・中御射山西・中御射山東遺跡 県営畑地帯総合土地改良事業御射山地区埋蔵文化財包蔵地緊急試掘調査報告書』
- 1985.07 原村役場 『原村誌 上巻』



第12図 ノリクラ石・御射山御力石の碑・発掘風景



第13図 発掘風景

発掘調査団名簿

- 団 長 鎌倉徳之極（原村教育委員会教育長 昭和60年5月～7月）
平林太尾（原村教育委員会教育長 昭和60年7月～ ）
- 調査担当者 平出一治（原村教育委員会）
- 調 査 員 日達 厚（原村教育委員会）
- 調査補助員 平林とし美
- 調査参加者 五味としゑ 菊地利光 真道ふき 中村すずみ 中村よし子 小林とみ子
鎌倉長重 北原和子 中村ふさゑ 野明春野 藤原智恵子 小林静子 宮坂
とし子 中村よしの 日達かおり（順不同）
- 事 務 局 原村教育委員会事務局 —— 行田竹輝（教育次長） 武田伊都子（指導主事）
辺見茂子 佐貫正憲

県営畑地帯総合土地改良事業御射山
地区内における埋蔵文化財散布地

昭和59年度踏査

遺跡番号	採集資料
遺跡名（地点）	
65 梨の木沢	土器片 1 点、土師器片 3 点、須恵器片 3 点
76 御射山	土器片 1 点（内耳？）（昭和60年度発掘調査）
79 中御射山東	縄文後期土器片 2 点（昭和59年度発掘調査）
80 御射山沢	縄文土器片 3 点
81 堤之尾根	縄文早期・前期土器片 8 点（内 2 点は押型文土器）、打製石斧 5 点、黒曜石 12 点
82 前沢	打製石斧 1 点、黒曜石 1 点、灰釉陶器片 1 点
83 花表原	打製石斧 1 点（昭和59年度発掘調査）
84 中御射山西	縄文土器片 2 点、打製石斧 1 点（昭和59年度発掘調査）
85 箕手久保	土師器片 4 点
86 判の木東	土器片 1 点、黒曜石 2 点
A	スクレイパー 1 点
B	土器片 1 点（内耳？）
C	土器片 1 点（内耳？）
D	縄文土器片 2 点
E	土器片 1 点
F	灰釉陶器片 1 点
G	黒曜石フレイク 1 点
H	縄文土器片 1 点
I	石鏃 1 点
J	黒曜石フレイク 1 点
K	縄文中期曾利式土器片 1 点
L	不明

調査担当者 五味一郎（原村教育委員会）

調査補助員 小林静子 藤原智恵子 宮坂とし子



遺跡分布図

原村の埋蔵文化財 3

御射山遺跡 (第2次発掘調査)

御射山地区県営畑地帯総合土地改良事業に伴う緊急発掘調査報告書

発行日 昭和61年3月20日

発行 原村教育委員会

長野県諏訪郡原村

印刷所 ほおずき書籍株式会社